

オーストリア「皇太子」の日本訪問（1）

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2003年9月30日 受理)

サラエボの悲劇という言葉で人は何をイメージするだろうか。1992年にボスニア・ヘルツェゴビナが旧ユーゴスラビア連邦からの独立を宣言した事から始まったボスニア内戦の結果、首都サラエボが包囲され悲惨な状況が生じたのは僅か10年程前のことであるから、その事を思い浮かべる人が多いかも知れない。しかし、世界史においては1914年6月28日オーストリア・ハンガリーの皇位継承者フランツ・フェルディナント親王¹⁾夫妻がサラエボ市内で暗殺された事件を指してきたのだ。

オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクはその著書『昨日の世界』のなかで「1914年²⁾7月28日、あの銃声がサラエヴォに起った。それはわれわれが育てられ、生長し、故郷として居た、安定と創造的な理性との世界を、一瞬にしてうつろな陶器の器のように千々に砕き散らしたのである。²⁾」と記している。この暗殺事件が第一次世界大戦を出来させた結果、古き良き時代のヨーロッパが完全に破壊されてしまったからだ。

日本ではフランツ・フェルディナント親王をオーストリア「皇太子」と記述する事が多いが正確に言えば皇位継承者であって皇太子ではなかった。と言うのは、1848年より1916年まで在位した皇帝のフランツ・ヨーゼフ一世にはルードルフと言う一人息子がおり、男系嫡流のルードルフ親王が皇太子であったのであるが、1889年1月30日にウィーン郊外のマイヤーリングで或る男爵の娘と謎の心中を遂げた。それ以降は皇太子と言う称号は存在しなくなる。家法に従うと皇帝の弟カール・ルートヴィヒ親王が皇位継承権を得た事になるが本人は皇位継承を希望せず、長男のフランツ・フェルディナントに継承権を譲ろうと希望し、皇帝も甥のフランツ・フェルディナントを事実上の後継者として遇し始めた。カール・ルートヴィヒは1896年5月19日に死亡する。それでその長男のフランツ・フェルディナントは正式に皇位継承者となるのである。

ツヴァイクの筆を借りるとフランツ・フェルディナントは民衆には不評であった。「帝位継承者はけっして人々に愛されていなかったからである。まだ私のごく幼かったころのことだが、皇帝の唯一の子息である皇太子ルードルフがマイエルリングで射殺されているのを発見された、あのもうひとつの日のことを私はおぼえている。あのときは全市が烈しい興奮に湧き立ち、おびたしい群集が遺骸安置を見ようと押しかけたのであった。皇帝に対する同情と、進歩的で非常に感じのいいハプスブルク家の一人として、人々が最大の期待をかけていた皇帝の唯一の子息であり相続人である人がその男ざかりになくなった、という驚きとが、圧倒的に現れていたのであった。それに反してフランツ・フェルディナントには、オーストリアにおいては真の大衆の人気にとって測り知れぬほど重要であるところのものが、まさに欠けていた。すなわち、個人的な愛敬、人間的な魅力、外見上

の親しみやすさである。私はしばしば彼を劇場で観察したことがある。彼は自分の機軸に、いかめしく横柄に座を占め、冷たい、動かぬ眼をして、ただの一回でも親しげな目差しを一般観衆の上に向けず、また心からの拍手で芸術家達を鼓舞することもなかった。彼が微笑しているのを見た者はなく、どの写真もうちくつろいだ態度を示してはいなかった。彼は少しも音楽にセンスを持たず、ユーモアに対してもセンスがなく、彼の妃も同じように無愛想な目つきをしていた。この二人の人物のまわりには氷のような空気が漂っていた。人々は彼らが友人を持たぬことを知っていたし、老帝が彼を心から嫌っていることを知っていた。彼は支配者の座につこうという帝位継承者のあせりをしかるべく隠すことを、心得ていなかったからである。ブルドッグのようなうなじと動かぬ冷たい眼とを持ったこの人物から何か不幸が起りそうだという私の神秘的な予感、それゆえけして個人的なものではなくて、広く全国民のあいだに拡がっていたものであった。そのため彼の暗殺の知らせは、深い弔意を呼びさまさなかった。³¹⁾とツヴァイクは記している。

フランツ・フェルディナントは何故この様に不評を買ったのであろうか。まず第一に考えられるのは、本来は皇位継承者にはなり得なかった彼が従兄のルードルフ皇太子の心中事件によって柵から牡丹餅の様に皇位継承者になった事への国民のやっかみであったのであろう。氷のように冷たいと評されたのは、1900年の貴賤結婚によって皇帝から疎まれ孤立してしまい宮廷社交において非情な差別を被っていた事が大きいのであろう。

フランツ・フェルディナントは伯爵の娘ゾフィー・フォン・ホテックと恋に落ち1900年には結婚を決意した。その時、彼は既に皇帝の座を約束された皇位継承者であった。それ故に悲劇が生じたのだ。ハプスブルク家の当主はオーストリア皇帝とハンガリー国王を兼ねていた。ところが、ハンガリーの王座には厳しい必要条件が課せられていた。王妃は国王あるいはそれに準ずる貴族の娘でなければならなかった。

ゾフィーの父はボヘミアの14世紀以来の古い家柄の貴族であり、ロシア、スペイン、ベルギー大使などを務めた外交官であった。母もウィーンの名家キンスキー伯爵の娘であった。ゾフィーは後に第一次世界大戦が勃発した際にはオーストリア・ハンガリー軍の総司令官になったフリードリヒ親王の妃の女官を勤めており、フランツ・ヨーゼフ皇帝が当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世と共にフリードリヒ親王家を訪問した際には、ゾフィーはフリードリヒ親王夫妻と共に両皇帝との記念写真にも写っているほどであって、決して低い身分と言う訳ではなかった。

フランツ・フェルディナントは皇帝に結婚の許可を迫ったが、歴史あるハプスブルク家の家法に従えば許可を得るのは不可能であった。仮に皇帝が許可を与えたとすれば、フランツ・フェルディナントはオーストリアの皇帝にはなれてもハンガリー国王にはなれず、オーストリア・ハンガリー二重帝国は分裂してしまうからである。皇帝には家法を変えようなどの考えは無かった。

フランツ・フェルディナントは恋に殉じた。ゾフィーとの結婚を果すために1900年6月28日に宮城において皇帝や枢機卿の前で公に以下の誓いを強いられたのである。ゾフィーとの婚姻は貴賤結婚であり、それゆえゾフィーは皇族にはなれない。また、生まれてくる子供たちも皇族にはなれないし、皇位継承権も得られない旨を誓わせられたのであった。7月1日にはウィ

ーンを離れてひっそりと結婚するのだが、正式の結婚写真の撮影も許されないという様な有様であった。宮廷内で妻子が差別される状況にあつては、フランツ・フェルディナント夫妻が暗くなってしまうのは当然の事であつたらう。二人が暗殺されるのはフランツ・フェルディナントの誓いの日から丁度14年後の事であった。フランツ・フェルディナントが好かれなかつたもう一つの理由は、彼がスラブ民族にもっと権限を与えようとした事であった。多民族国家の中で権限を独占したドイツ民族とハンガリー民族にとっては受入れ難かつたからだ。

このフランツ・フェルディナントが日本を訪問しているのである。当時、肺結核を病んでいたフランツ・フェルディナントは海洋の新鮮な空気を吸う事で病気を治し、将来の皇帝としての見聞を広めるために、水雷・衝角巡洋艦エリーザベト皇后号（以下エリーザベト号と表示）に乗船し当時オーストリア領であったイストリア半島の軍港ポーラを1892年12月15日に出港し、地中海を東に向かいスエズ運河を通りインド洋に抜ける。インド、ネパール、セイロンを訪問した後ベンガル湾、マラッカ海峡を経てシンガポールとジョホールを訪問する。更にジャワ、オーストラリア、ニューカレドニア、ソロモン諸島、ボルネオを訪問しシンガポールに戻る。そこから香港、広東、澳門、香港を経て日本に向かい1893（明治26）年8月2日長崎に到着する。そこから熊本、京都、大阪、奈良、名古屋、箱根、東京、日光、横浜等を訪問し8月24日にはエリーザベト号からカナダの汽船エンプレス・オブ・チャイナ号に乗換えヴァンクーバーに向かう。9月5日ヴァンクーバーに到着後北米大陸を横断し10月7日にはフランスの汽船ブルターニュ号に乗船しニュー・ヨークを出港して大西洋を横断しル・アーブル港に到着、パリ、シュツットガルトを経由し10月18日にウィーンに帰還するのである。

従兄の皇太子ルードルフの死後、将来のオーストリア皇帝の地位を約束されていたフランツ・フェルディナントは世界一周旅行を決意したが伯父の皇帝フランツ・ヨーゼフ一世はそれに反対であった。父と継母の仲介に加えエリーザベト皇后の口添えでやっと皇帝の許可を受け10ヶ月に及ぶ世界旅行を実現したのであった。この世界旅行が単なる物見遊山でなかつた事は、彼が残した詳細な旅日記を見れば分かる。帰国後、旅日記を公刊しているが⁹⁾、驚くべき事にその印刷原稿はフランツ・フェルディナントが自筆で記している。随員が代筆したのではないのだ。

この日記を読むとフランツ・フェルディナントの聡明さと優しさが理解できツヴァイクが描いた人間像とはかなり違つたのではないかと思えるのである。例えば、8月17日東京に到着するや直ちに明治天皇の招宴に応じ昭憲皇后と腕を組んで午餐会場に入場する際のフランツ・フェルディナントの冷静な観察と所感を讀むとハプスブルク家の家法を熟知していたであろうし、ゾフィーとの結婚する事の困難さは十分に予測していたのだと推察できる⁹⁾。次の皇帝になる身分であるにもかかわらず、一人の女性に惚れこんで理性を失ってしまった馬鹿息子であるとは絶対に思えないのである。この様に自分の意志を貫徹したフランツ・フェルディナントであつたのが、貴賤結婚の前にも皇帝に抗い自分の意志を通して世界旅行を実現したのである。筆者は、そのフランツ・フェルディナントの人間性が理解される様に、23日に及ぶ日本滞在中の日記を紹介したいと思つたのである。

尚、フランツ・フェルディナントの思いを直接的に理解して貰える様に取って直訳調とした。

フランツ・フェルディナントの訪日日記 《1893（明治26）年8月2日～24日》（その1）

8月2日、長崎

朝には激しい風雨が南西と南東から吹いて来た。強い波でエリーザベト号は暫くのあいだ18度まで横揺れした。昼前に少しのあいだ宇治島が見えた。昼頃には甌島列島の島々が見えてきた。それから強い雨が我々に注ぎ如何なる眺望もが阻害された。午後4時過ぎになってやっと晴渡ってきて、野母岬が見えてきた。そこで我々は今や長崎港への進路を取る事が出来た。

長崎は日本の大きな島の中では最も南に位置する島である九州（九つの国）に所在する。日本帝国はニッポンまたはニホンとも称し、382,412km²の領土⁶⁾と40,718,677人の人口を有し周知の様に多数の島々からなるが、その中でも大きな四つの島がある。すなわち、九州、四国、ニッポンあるいは本土（本国）が本来の日本を形成しており、最後に北に位置する蝦夷が来る。日本領土の残りの部分は多くの小島からなっている。

高く立ち上る煙が細長い長崎湾の入口にある高島の位置を報せた。この島では非常に低質の瀝青炭が産出されており、長崎に入港する汽船は規則によりその瀝青炭を補給しなければならない。

九州島、あるいはもっと正確に言えば、九州島の西側の陸地と海が非常に入組んでいる肥前半島は、緑濃き植生で山岳地帯が完全に覆われている様に見える。海岸、特にその前を占めている島々は、多くの場所で奇妙な形を示している。非常に優美な長崎へ入港すると大抵の人はノルウェイのフィヨルドを思い出す。というのは、幾重にも湾曲して凡そ3海里の長さの水路が島々といくつもの岬の間を貫いて港の入口まで続いており、湾の遠景に山間盆地と山の斜面に位置する長崎（長い岬）の街が見えて来る。明るい欧州風の都市地域がはっきりと際立っていて、そこからは諸々の領事館の信号柱が聳え立っており、一様に灰色な家屋の海が北東の浜辺に延びている日本人地域と区別されている。内港の入口には日本海軍の海洋技術の施設や船渠などが所在している。

公海上には既に日本の水雷巡洋艦八重山が我々を待っており、道案内の信号を發して、水先案内船としてエリーザベト号の前を航行する事を申し出た。八重島の甲板上では軍楽隊が音楽を響かせており、明らかに我等の国家を演奏していた様であったので、我々も返礼が必要と思い日本国歌を演奏して御返しをした

私は親王旗を掲げず非公式に長崎に入港したのに、日本側はそれを妨げて、停泊している多数の軍艦が礼砲を發射し登櫓礼⁷⁾を行うべく、準備万端が整っていた。1隻の水雷艇が港の中で我々の回りを稲妻の様な速さで旋回し投錨場所を示した。水中に我々の国旗が漂っていた。港の入口には英国の大型巡洋艦レアンダー号がいた。機関の破損で当地に入港する必要があったからだ。その他に港内には日本の軍艦の1個艦隊がいた。旗艦の巖島、更に松島、高尾、高千穂、開聞と葛城の他に道案内を行なった高千穂も停泊した。これらの総ての軍艦は美しく立派な船舶であり、最新型のモデルに習って建造され、最新の海事技術と鋼船技術が施されていた。という

のは、日本はその艦隊建造のために少なくはない犠牲を払ったのであって、海上兵力に大きな誇りを持っている。現状では55隻の軍艦を保有し、その合計は55,053トンで、公称79,694馬力あり、439門の艦砲と6,815人の乗組員を有している。

夕刻に公使のビーゲレーベン男爵が正装して艦上来訪し私に日本滞在の日程を告げた。驚いた事に、横浜までエリーザベト号で航海し、そこから初めて公式旅程を開始すると言う、私の希望を満たす事が出来ない旨を知らされた。陸地を旅行する準備が既に講じられており、日本側随員メンバーは、「横浜からにして欲しい」と既に電報で前もって頼んでおいたのに、既に長崎に到着していたのだ。それゆえ、非常に賞賛されている瀬戸内海を、私にはいとおしくなっているエリーザベト号で航海し、少なくとも日本の一部では非公式に気楽に見物する事を断念しなければならなかった。そして、既に長崎から公式的に日本側の高官によって、凱旋行進の様なやり方で陸地を案内して貰わざるを得なくなった。

8月3日、長崎

濃い霧が海面にまで下りて来て視界を妨げ、更にひっきりなく雨が大雨りした。ユーピター・ブルビウス⁹⁾は、この旅行の間に私を既に何回も苛めていたのであるが、当地においても、その役割を降りたくない用に思える。しかしながら、この気紛れな天気の時が丁度いま空の水門を開いたのは、私が彼を悪く見なしたからだろう。これまでの6週間一滴の雨もこの地に降らず、住民が既に雨乞いをして神々の助けで豊かな雨を得て、非常な危険に迫られている米の無事な収穫を祈願していたのだ。この様な願いの実現がより以前にかなえられる事が出来なかったのは、私のために降雨を若干延期したかったからであろう。それでこの天気の不具合でもって午前中に私が長崎を訪問するのを阻んだのだ。突然の豪雨が謁見と表敬訪問を実施出来なくしたのであろう。

親王旗がマストに掲げられるや否や、当地に停泊している軍艦から発する砲声の響きで港が轟いた。各艦がそれぞれ21発の礼砲を発射したからだ。私に対しいつも尋常でなく讃える作用を齎す榮譽礼だ。その榮譽礼はわが国の親王旗に向けられているのだ。この様な儀礼の後、エリーザベト号の舷門には沢山のランチとボートが押寄せてきた。そこから殆ど途絶える事のない行列で高官たちが乗艦してきた。提督たちと艦長たち。長崎県知事の中野武昭、司教兼法王使節ヴィカー・J・A・クザン、長崎市長、領事団のメンバー及び私に随伴する日本側随員たちである。この随員は、私の旅程の管理を規則に従って実施する、宮内省式部職の三宮芳種、さらに、天皇の料理人である大膳職のK・山内、最後に海軍大佐の黒岡と陸軍大臣秘書官の陸軍少佐M・村木から構成されている。これらの人々はドイツ語かフランス語を自由に操れる。そのうち3人は既に欧州を、なかんずくウィーンを訪問して、宮廷の運営と儀典を研究して来ているのだ。

高官たちによる混雑が午後の内に終わりとなった後、長崎を訪問すべく陸地に向かった。初めて日本の土地に足を踏み入れたのだが、街は純粋な日本の特徴を備えておらず欧州の影響の多様な作用を示していて、彼の地の総てが直ちに現実になっていて綺麗で、色鮮やかで、生き生きとした光景に囲まれていた。これらの光景は我々が書籍から聞き知ったり芸術的なあるいは産業的な

製品の表象から想像して来た日本の生活に関する我々のイメージの内容を消し去ってしまった。

幅が狭いけれども、小さな家々で2階建を超える建物が殆ど無く、風通しが良くて明るい通りに沿ってぶらぶらと歩きながら、恋人の部屋に窓から入る様な調子で、実践的な記述民俗学を实践したのだ。木と紙から出来ている住居は、日本人の居住空間のみならず、そこで起こっている生活をも覗き見る事を許した。というのは、通りに面した家々の境は殆ど可動の間仕切り⁹⁾からなっており、昼間は殆ど外されているので、家の中は側を通り過ぎる者に丸見えになっている。また、内部空間の仕切りも木で出来て紙が張られ、しばしば芸術的な絵が描かれている間仕切り¹⁰⁾から出来ており、必要に応じて開閉出来るのである。日本の家は、それ故、居住者の空間的必要にこの様な方法で適応する能力を有しているのである。この事は、我々の建物の固くて、不可動の壁に慣れている者にとっては大きな驚きであった。日本の住居に於いては我々の国で意味する“不動産”は認められない。我々が家財道具と見なすものは、ささやかな境界を移動する。例外は絶対に必要な使用のための装置であり、主として美しく、明るい黄色の麦藁のマットで出来ており、それで総ての床面を覆うのである。総ての職業的な労働は非常に様々であり、作業場や、販売店舗で遂行されており、日本人の勤勉性や芸術的センスの証拠として快適な作用を齎すのである。

我々は道路を更にどンドン歩いて行ったので、日本国民の日常生活で行なわれている、家の中での仕事振りを目撃する事が出来たが、幾つかの家族の品格のある光景も我々の前で営まれていた。そして、多くの日本の息子たちや娘たちの私的な生活の様々な様相を観察する事が出来た。我々の風俗習慣では、城の中では扉が音を立てて閉められると、私的な行動と公的な行動の間には鋭い境界が引かれているが、当地に於いては似たような区別は無い。というのは、こんなにも開放的に我々の前に存在する家屋の中での生活は気付かなくても道路に溢れ出してしまうし、逆に屋外の出来事も障害なく屋内に押寄せて来るからだ。

我々が常に覗いた所では、清潔さと快適さが、支那の国民性に特徴的な非清潔さに対して快き対極を為して、我々を感動させたのである。

西洋文化は、日本に於いてはびっくりさせられる様な短期間でそれまでの伝統を破壊してしまったのであって、日本人の姿かたちに余りそぐわない洋服が日本人にとって益が無いのにも拘らず、既に普通の服装になってしまっている。日本社会の中層以上の階層は殆ど洋服のみを着用している。宮中への伺候者や官吏に対してはその様に規定されているからである。多くの人々は何世代にもわたって慣れ従ってきた古い従来の和服の着用で固執しているが、近々の内には下層階級も新しい服装への譲歩をして、服装の習慣に於いても洋服への突破口が開かれるのであろう。民族衣装に対する率直な友人として言えば、非常によく似合っている和装を、我々の平凡で特色の無い洋装によって排除してしまうのは、惜しいと思う。多くの日本人には日本特有の衣装が非常に似合うだろうに、長いフロック・コートを着、高いシルク・ハットを被り荘重に歩いたり、ひっきりなしに御辞儀したりするのを見ると、違和感を齎すし、快適であるとはいいい得ないからだ。

我々の周りを男女が急いで通り過ぎて行く。国の習慣に忠実な場合はいつも扇子を扇ぎながら草履や下駄で悠然と足音を立てながら歩いている。何人かの男たちが感じよく非常に姿かたちが

整った見掛けであったのを除くと、男たちは平均的には美丈夫ではないと私には思えた。顔立ちには蒙古人種の特徴が強烈にあらわれており、身長は低く、脚はしばしばサーベルのように曲がっている。

男性と比較すると人口の女性部分は綺麗である、もっと正確に言うと、非常に可愛いというべきである。我々が見かけた日本女性はみんな同じタイプで、笑ったり冗談を言いあったりしながら道路を気取って歩いていたが、命を吹き込まれた非常に可愛い陶器の像の様な印象を与えた。我々は時々非常に整った美しい顔立ちの娘に出会った。欧州の美形と比較されたとしても、総ての美点が認められるであろう。そうとも、私が読んだとても多くの旅行記の中でも、私が受け取った非常に多くの報告の中でも、この地域の少女たちがエヴァの娘たちの中で最も美しいと描写されて、日本女性の女らしさが称賛されているが、私も長崎を歩きまわったので、その様な判断が出来る可能性を提供された。このような称賛は全く個人的な好みと特殊な動機を計算に置いておくべきであるとしても良い。絶えず快活に呼吸している少女たちの姿の優雅な印象は、風貌の調和の取れて、感じの良いのと可愛い事にあるのだが、欧州的な美しさの意味からは余にも人形の様であると思われる、主張するには一つの女性の理念型を描写しておかなければならない。残念な事に、日本女性の若い輝きは非常に急速に萎れてしまうので美しい成人女性に遭えるのは極めて稀である。既婚女性が歯を黒く染め眉毛を剃ってしまうと言う、我々には理解できない風習があるからである。このように女性を醜くしてしまう風習は社会の中層以上の階層には勿論の事もはや行なわれてはいないのであるが下層階級においては現在もおありふれた事なのである。

人々を観察すると、日本の既婚女性たちは一部ではあるにしても今日に於いても夫たちのために見た目を犠牲にしているのであるが、女性たちはこの方向に絶対不可避に突き進んでいる訳ではない様に見える。というのは、総ての日本女性は既婚者も未婚者も彼女たちの着物や髪型を几帳面に手入れしている。我々はこの点についても色々な経験をする機会を持てた。我々は多くの女性がどのようにして美しく化粧するのかを実際に見たからだ。我々は人目を避けずに光景を楽しむ事が出来ただけではなく道路から堂々と自由に婦人の私室を覗いて日本女性を魅了する芸術の最も内輪の秘密を知ったのである。ところで、我々の好奇心が不愉快を感じさせる事は全く無かった。思いもよらず自由に風習を観察できる事に我々が驚いているのを見ても、招かざる客の視線を防ぐために、優美な襖戸が閉められ事は無かったし、全く反対に、覗かれた女性たちは親しげに会釈したり、高い声で笑ったりした。

最も複雑な化粧の構成部分は髪の手入だ。最大の注意を払う必要があるし、新たに結び直すのは3日か4日に一度しでしかない。それに、この様な素晴らしい作品を作り上げるのには、支那の女性と全く同じように、大きな骨折りと2時間程度の時間の浪費を要するのだ。私には、当然の事ながら、この芸術作品の生成過程を最初から最後まで脇で見ただけの忍耐は無かった。大胆に聳え立ち、それから、なまめかしく後方に突き出る様にした髪飾り付けに、無数の中込材料が髪の内部を固定し、十二分に用いられたポマードと油が外側の滑らかさと輝きを与えるのだと言う知識を得ただけで満足したからだ。簪、櫛、花、羽、リボンや、様々な飾りが付けられて、欠かせ

ないものとして総合的な効果に寄与するのだ。60種類の異なった髪形が存在すると言われ、それどころか、知識があれば、それぞれに特別の意味があり、髪型で、その女性の状況や意図が説明されるのだ。我々の国では美女たちは花と扇子だけで自分の意思を示す事が出来るだけだが、日本の女性は「髪形の言葉」も知っているのだ。それで、例えば、ある未亡人が新しい連れ合いを見つけて幸福を求めるのが嫌でなければ、ある特定の鬘を結うし、他の未亡人が貞節を誓っているのであれば、明白に公然と再婚を断念していることを示す鬘を結うだろう。鬘をこの様に使用する事で実際の結果を決定する訳ではないが、少なくとも結婚の申込に行くのが許容されるのである。その女性を激しく恋焦がれている男性に対し、望みを叶えてあげるのか否かを教えてあげるには、その女性の家長に会う事のみが必要であるのだから。

非常に魅惑する効果を有するのは日本女性の民族衣装である。それは着物であり、踝まで届き、前が少し開いている衣服で、広がった袖と、幅広い飾り帯、即ち、帯、を後方で大きな結び目に結んで一緒に留められている。着物は、柔らかく無理なく、体形にぴったり合っており、いささか尋常でない優美さを齎し、最も有利な様式で効果を発揮する。しかし、着物は、日本女性の優雅で控え目に造形された体形にのみ適するのだと、勿論の事ながら私は信ずるのだ。この事は、余談ながら、今になっても、まだ洋服を着用していない日本男性の衣服についても言えるのだ。女性が着用しているのよりも短くて簡素なだけだろう。男性の帯は腰に何度か巻かれた細長い布の様に見える。侍たちは、この国の実質的君主として天皇の政府の権限を行使した将軍や、大封建君主であった大名たちの家臣であったのだが、以前は二振りの刀を差していたのだ。1876年に帯刀禁止令が公布されてからは、帯は全く平和的な用途を有するようになり、着物を締める以外には扇子と煙管入れを挟むのみとなった。

子供たちが大人と同様の衣装を着用しているのを見ると、ヨーロッパ人は最初は奇異な感じを受けるのだが、可愛くて小さな人間が衣装を身につけると実際の年齢よりも老けて見えるのを見て楽しくなる。日本の空の下では若者の身体的精神的発展は明らかに非常に早く行なわれる。いたいけない年齢にも拘らず全く老成した表情で落ち着いた振舞いの子供たちを少なからず見た。我々の生気溢れる快活さからすると苛々させられた。

我々は長崎を常に新しいものに刺激され増進する好奇心を以て歩き回ったのであるが、その街はヨーロッパ人にとっては、なかなしく、キリスト教徒にとっては、最高の興味をそそるのである。今もなお、日本の最重要な商業都市として栄えている長崎は、16世紀の半ばに大名の大村氏がポルトガル人の居住を許した後に貧しい漁村から発展した。キリスト教は九州で土着の人々に最も深い根を下した。日本への使徒、若きイグナティス・ロヨラと聖フランシスコ・ザビエルが1549年に当地九州の鹿児島で日本の地に足を踏み入れたのだ。比較的短い時間でキリスト教は、様々な事情で厚遇され、急速に広まった。しかし、この様な大成功が正に次の事態、つまり、1614年に将軍家康によって公布された布告を理由として急速に全国に例外なく実施された絶えず血腥い迫害として急速に現れる反動の原因となった。この様なキリスト教徒の迫害によってカトリック教徒の世界は闇の世となってしまったのだ。それからと言うものは何千人もの人が賛嘆に値する様な毅然さでその信仰への忠節を非常に苦

痛に満ちた死を以て確証したのだ。しかしながら、キリスト教徒の世界の中では、新しく樹立された宗教が血の海の中でも益々強固になって行ったが、信仰告白者に対して残虐なる措置が講ぜられ、日本に於いて救いの教えを根絶やしにする事に成功するのである。

ついに1636年になると、20年にわたって続いた残虐行為が叛乱を生じせしめる事となり九州島の有馬藩領等の3万人から4万人に達するキリスト教徒が遂に武器を執り島原にあった有馬の古城や隣接の島々に立て籠もる。1637年には葦田四郎¹¹¹の下で、これらのキリスト教徒と戦うべく派遣された板倉重正に対し、三ヶ月にわたる英雄的な抵抗を行なう。しかし、最後には堅固な要塞も征服され勇敢な守備兵たちは虐殺された。血の河が流れ、数千人に達した囚われのカトリック教徒たちは海拔60メートルにまで険しくそそり立つ長崎港の入口の西側に前にある高鉾島に引立てられ、その島の目が回るような高地から大海に投込まれた。オランダ人たちは身の毛もよだつ光景を追憶するために、その舞台となった島をパーベンベルクと名付けた。しかしながら、歴史の伝承が真理に基づいているとすれば、オランダ人自身は名誉の記念碑を建立出来ない。というのは、カトリック教への憎しみと通商への妬みが分別を失わせ、オランダ人たちは、蜂起したカトリック教徒と戦う幕府を、武力を使用して支援したからである。

島原に於ける血の海に続いたのはポルトガル人の追放とキリスト教の殆ど全面的な抑制であった。キリスト教は、幾つかの場所で、取分け長崎から遠くない浦上と言う大きな村で、現在に至るまで信仰されたのではあるが、日本を最近の時代まで完全に孤立させた全面的な鎖国の時代が始まったのである。支那人とオランダ人が殆ど独占的に西方との通商を、ささやかな規模ではあったが、営んだのである。オランダ人は1641年には平戸の根拠地を閉鎖して、人工的に造成された土地で壁と堀で周囲を囲まれ日本人の番人が見張っている一本の石橋で長崎と連結されていた出島に移住しなければならなかった。この様に厳しく留置された状況で、言い換えれば、幽閉された状況で、出島の中では、いつも20人程のオランダ人が日本と母国の間の取引を仲介したのである。当初は1年に1隻の船しか許されなかったが、後になると8隻が許された。

この様な取引から齎された儲けは、オランダ人たちが2世紀以上のあいだ服従した、非常に多くの無礼さに対して報いられる為には、実際のところ、非常に著しかったに違いない。出島の住民たちは毎年大きな費用をかけて最強の警備の下で綿密に決められた式次第に従って江戸に向かって実施すべき旅をして、将軍に贈り物を運んだ。正式な謁見で幕の後に隠れた将軍に対し手足を下に付けたまま這って進み、頭を床に沈め、そして再び蟹の様に静かに退出する事で敬意を表したのである。これに続く、幾分は非公式の面接の際でのオランダ出島住民の随員の任務は、宮廷の婦人たちと他のメンバーの気晴らしをする事であって、将軍の命令によって歌ったり、踊ったり、酔っ払いのまねをしたり、この種の悪ふざけを色々和演じなければならなかった。人は卑賤なる富が欲しければ何でもやりかねないのである。榮華を誇った商人根性と甚だしい屈辱の舞台となって、永久に記憶さるべき旧出島は大火の犠牲となって燃え落ちて、新しい居住の場所が建設された。我々の時代に生じた強烈な関係の変化が過去に及んで、あの場所の変化を通してヨーロッパ人に古き日本に対する不名誉な思い出を避けようとするかの如くに。

長崎での散歩の際に我々がしばしば十分に休止したのは、若干好転した天候が許す限りは、港を囲んでおり、入港の際に既に我々を魅了した、景色の眺めを楽しむためであった。長崎湾は、既に述べた様に、西は高鋒によって閉じられ、他の方向は、なだらかな傾斜地を持った丘陵と400メートルの高さにまで聳え立っている山岳によって囲まれ、港は目立たなく隠された山間の湖のような性格をそれ自体で持っている。これらの高地からは下方に総ての種類の開墾地とそこここに小さな森や、村々や、寺院や、小さな家々が見える。上のほうは部分的に極めて絵画的で、松や、杉や、楠で覆われている。総ての色彩段階の色合が山の頂上から下に耕作され花で飾られた野原に至り青みがかって、かすかに光っている海に向かって我々を照らす。平らな海面には何隻かの巨大な軍艦と汽船が平和な雰囲気投錨している。無数の漁船がのろのろと進んでいる。様々な帆船が動き回っている。

長崎は58,000人の住民を有するものの横浜や神戸の町の様に生産が盛んな後背地を有する訳ではないが、どの様な大きさの船舶も入港できる港の御蔭で重要な商業都市であり、鼈甲細工や、漆器や、陶器や、更には、石炭や、米や、茶などが輸出されている。

特に外国人の購買をあてにしているので、あらゆる種類の日本の製品、つまり、我々が珍しいと思う様な物を蔵する無数の店舗が街に溢れている。それ故、英語で書かれたラベルで表示している店舗は総て最も進歩していると見なされ、私には最も趣味が良くて最高品質の物品を提供している様に思える。しかし、その後で、店舗の主人が愛想笑いしながら述べるのは法外な値段であり、それから、買う気十分な外人に絶妙なタイミングで値引きをして、買う気になった外人を煽って更なる購入をさせるのである。九州地方は、同名の島とその領域を包摂しているのだが、昔からずっと有名な陶磁器産業の本拠地である。それで我々は有田磁器や、肥前磁器や、更には、天草諸島で産出される磁器用の陶土で出来た天草磁器や、黄色の素地に色彩に富んで華麗な彩色がヨーロッパでは高く評価されているが、それほどには私の趣味に合わない薩摩陶器を至る所で見るとなる。

堂々とした商店の並びを既に我々は通り過ぎてしまったので、当地ではレストランの地位を代理している、無数の茶屋の中の一つに今や足を向けた。茶屋は極めて品が良く、殆ど金銀の線条飾り付で建設されており、調整可能な間仕切によって、需要に応じて拡大・縮小する事が可能な一連の部屋と開けっぴろげのベランダを有する。客がここに到着すると、通常は茶や、米のワインでシェリー酒に似た味の酒などの飲料をちびちびとすすむだけではなく、完璧な食事をする事が出来るのだ。この国では歌い手と踊り手が実演して宴会を活気付ける習慣が支配しているので我々もこれらの芸人たち、即ち、茶屋の中にはなく、外に住んでおり、そこからこちらに呼ばれる芸者を来させる様に注文した。

我々が開けっぴろげのベランダの柔らかいマットの上に腰を下すや否や、既に女将が、姐さんと言う言葉で呼ばれるのが習慣で10歳から18歳までの少女たちである女給仕たちの一団と、無数の漆器の箱や、小鉢や、茶碗や、小皿で、我々に晚餐を供する為に現れた。料理は当然の事ながら我々の味と完全に一致した訳ではないが、支那料理よりはずっと美味しいと私は思った。魚と米が料理の主要素材であって、我々は、最初は酒を飲んだのだが、私はビールがあるのを見つけて、

高貴なる大麦の汁を楽しんだのであった。

晩餐の間、最初に歌手たちが登場してきた。それは総て衣装を付けて、髪を結って、厚化粧をした若い女の子たちで、何度も頭を下げてから我々の横に腰を下ろし、月琴と琵琶というマンドリンの様な楽器を撥で弾いて演奏しながら歌を唄い始めた。この歌は少しの音階の間を動き、非常に単調な印象をもたらした。酒を飲む間は陽気な歌か、少なくとも早いテンポのものを女性たちに演奏させる試みは完全に失敗した。

非常に可憐で魅力的であったのは踊り手たちの出し物であり、ある様式に振付けられた動作を座興に披露したのである。我々は巧みさと活発さ、それに加えて、最も完璧な様式でやり逃げようとする努力が成功したのに非常に驚嘆した。芸者たちは舞踏学校の出身であるのだが、紛れも無く自然な、踊り手たちが際立たせる日本人の本質に備わった、優雅さなのだ。というのは、前に踏み出したり、後に戻ったりする、回転したり、向きを変えたり、身を沈めたり、立上ったり、扇子を保ったり、動かししたり、衣装にしわをつけたり、長い袖で演じたりという作法は、これら全体で完璧な優美さを発散するのだ。何時間も畳の上に静かに座り、茶を啜りながら、この光景を楽しむのを日本人は好むのだ。私は、芸者たちに総ての敬意を表して忍耐するのではなく、非常に楽しいので、この出し物を長い時間楽しみたかったのだが、取分け異国人として、長年十分に理解してきたのではない物に対して退屈になった。踊りは一定の筋書きを説明しているのであろうが、その筋書きは勿論の事に我々には全く分らないままであった。最後の出し物には第一人者もが登場した。13歳の年齢の少女で、この地域の最高の踊り手で、彼女の師匠の誇りであった。この芸者は一連の難しい踊りを演じて仮面や花などに助けられて素晴らしい様式に展開した。我々の宴会に出席していた一人の日本人は非常に完璧な演技に全くうっとりして至福の微笑を浮かべた。しかしながら、私は、日本の状況のなかであると言う事をひょっとすると十分には考慮に入れていないのかも知れぬが、私が子供を見世物にする様な類のものに対し感じる、故郷での抵抗感を免れる事が出来なかった。

茶屋のベランダから、長崎の街とその郊外の素晴らしい眺めを楽しむ事が出来た。色とりどりの帯の様なものがこの小さな屋内の庭の中を超小型の庭園の部分にまで伸びており、そこでは非常に狭い範囲にあらゆる種類の飾りを、更には非常に沢山の咲き誇る花とバロック様式に剪定された樹木を含んでいる。

この街の狭い通りに人力車があっちこっち高速で行き来している。茶屋での様々な料理と余興を十分に味わってしまった後で、この乗物に乗って更に街をドライブしたいと打明けた。それから、夜更けに船に帰り、下船と陸地の旅への準備をしなければならなかった。

私が街に居た間に、知事が私に長崎とその郊外のセットや、あらゆる景色や、番の矮鶏の標本セットなどの、若干の写真を船に送ってくれた。よく気が利いており、私はこの親切な寄贈者に感謝する。

8月4日、長崎一熊本

日本側によって決定された日程表にしたがって水雷巡洋艦八重山に乗艦した。エリーザベト号と

の別離が生じた。その別離は一時的で短時間のものでしかなかったが、もう本当に辛く、目前に迫っている横浜での別れの予行演習の様であった。私が我等の船を離れる際には心が痛んだ。礼砲と横静索礼¹²が実施された。そして、我等の勇敢なる水兵達の万歳の叫びが私を送り出し、私の内部に尚も長く余韻を残したのだ。

八重山艦上で大掛かりなレセプションが開催された。このレセプションで知事、全艦長を伴った提督、日本側随員、多数の頭官たちが私を歓迎した。そのあいだ真っ赤な軍服を着用した海軍軍楽隊が国歌を演奏し始めた。大帆柱に親王旗が掲揚されると総ての艦艇が満艦飾を実施していたが、21発の礼砲で挨拶した。それで長崎の港は直ちに濃い煙で覆われてしまった。我々が錨を揚げるや否や礼砲と登樯礼が繰返された。小柄な日本水兵たちの万歳の叫びは我々の海員の力強い肺臓から轟然と発せられる様には轟き渡って聞こえては来なかった。八重島は澄渡った空の下S字型に曲がった港口をパーペンベルク島の傍を通過して三角に向かって出港した。

1隻の水雷艇が我々に同伴した。それに隠れて、我々が長崎湾を去るや否や突然現れて礼砲を轟かせながら1隻の華麗な巡洋艦が接近してきた。それは我々のエリーザベト号の型を縮小したように見えたが、我々の航跡に従った。(紙幅制限のため続きは次号に掲載。)

註

- 1) フランツ・フェルディナントの称号はドイツ語では *Erzherzog* であり、その家長がオーストリア皇帝・ハンガリー国王であったハプスブルク家の皇族男子の称号である。大公と訳される事が多いが、同じく大公と訳される *Großherzog* と区別し、ハプスブルク家の皇族男子の称号である事を明確にする為に親王と訳した。
- 2) シュテファン・ツヴァイク著、原田義人訳『ツヴァイク全集 19 昨日の世界 1』(みすず書房、1973年) 316頁。なお、この訳本の第1刷の刊行は1973年であり、筆者が使用したのは1989年刊行の第6刷であるが、肝心の暗殺の日付が7月28日と誤ったままである。この翻訳の底本は1944年にストックホルムで刊行された初版である。底本に日付の誤りがあるとは思えないが筆者は未確認であり、1947年に増刷された版しか参照できなかったが、その *Stefan Zweig, Die Welt von Gestern, Erinnerungen eines Europäers Stockholm, 1947* の247頁には日付が6月28日と正しく記載されている。
- 3) 同上原田義人訳、320~321頁。
- 4) *Erzherzog Franz Ferdinand, Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892-1893*, Wien, Erster Band 1895, Zweiter Band 1896. この日記のうち、フランツ・フェルディナントが日本に滞在した1893(明治26)年8月2日~24日の部分をドイツ語の原文から日本語に翻訳して、ここに紹介する。
- 5) フランツ・フェルディナントの侍医ヴィクトーア・アイゼンメンガーは1930年にフランツ・フェルディナントに関する回想記を著し、1899年の春フランツ・フェルディナントが結婚に関して相談を持ちかけてきて、「自分はやっと、私を愛してくれて、私に相應しい婦人を見つけたが、彼女の家柄の非常に小さな問題のために信じられないような困難が私に課せられている。しかし、その問題については何とか克服するつもりだ。」と説明し、しかし彼がそれより心配しているのは、彼の結核が彼女や生まれてくる子供たちに伝染したり遺伝したりしないかどうかだと尋ねたが、侍医は、結核は遺伝する病気ではないし、もう2年以上にわたり、喀痰検査で病原菌が発見されていないのだから、健康上からは結婚に何の問題もないと答えたと言っている。Victor Eisenmenger, *Erzherzog Franz Ferdinand, Seine Andenken gewidmet von seinem Leibarzt*, Zürich, Leipzig, Wien, Amalthea-Verlag, 1930, S.130.
- 6) 現在の日本領土に北方四島を含む千島列島全体を加えた数字。
- 7) *Raensalut* の訳。英語では *man the yards* と言う。帆船の帆桁の上に乗組員が並んで立つ海軍の礼式。
- 8) *Jupiter Pluvius* の訳。Jupiter と言うのは古代ローマの昼間の空の神。Jupiter Tonans として嵐を齎し、Jupiter

Pluviusとして雨を齎す。

- 9) 雨戸の事。
- 10) 襖の事。
- 11) 蕪田四郎は Nirada Schiró の訳。明らかに天草四郎こと益田四郎時貞を指していると思われる。天草四郎が蕪田とも名乗ったのかどうかを調べたが、そんな事実はない様だ。おそらく、Masuda と書かれたフランツ・フェルディナントの手稿を印刷の際に間違えたのだと思われるが、手稿で確認しないと断定は出来ない。
- 12) Wantensalut の訳。英語では man the shrouds と言い、帆柱を固定する帆綱を固定する横静索が縄梯子状になっているところに乗組員が片手で帆綱を掴んで立つ海軍の礼式。

参考文献一覧

- 1) Erzherzog Franz Ferdinand, *Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892—1893*, Wien, Erster Band 1895, Zweiter Band 1896
- 2) Hermann Heller, *Erzherzog Franz Ferdinand Der Thronfolger Österreichs*, Brünn 1911
- 3) Victor Eisenmenger, *Erzherzog Franz Ferdinand, seinem Andenken vom seinem Leibarzt*, Zürich · Leipzig · Wien, 1930
- 4) Victor Eisenmenger, *Archduke Francis Ferdinand*, London, 1931
- 5) Ludwig Wender, *Der Thronfolger*, Zürich, 1938
- 6) Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern, Erinnerungen eines Europäers*, Stockholm, 1947
- 7) シュテファン・ツヴァイク著, 原田義人訳, 『ツヴァイク全集19 昨日の世界』, 1973年、みすず書房第1刷 発行 (参照したのは1989年発行の第6刷)
- 8) Rudolf Kiszling, *Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich Este*, Graz-Köln, 1953
- 9) Staatsverwaltung für Denkmalpflege und Naturschutz des Kreises Mittelböhmen, *Das staatliche Schloss Konopiště*, Prag, 1980
- 10) Wladimir Aichelburg, *Erzherzog Franz Ferdinand und Artstetten*, Wien, 1983
- 11) Friedrich Weissensteiner, *Franz Ferdinand*, Wien, 1983, 2. Auflage 1984
- 12) Alexander Sixtus von Reden, *Österreich -Ungarn, Die Donaumonarchie in historischen Dokumenten*, Salzburg, 1987 (3.Auflage)
- 13) Renate Basch-Ritter, *Österreich auf allen Meeren, Geschichte der k.(u.)k. Kriegsmarine von 1382 bis 1918*, Graz · Wien · Köln, 1987
- 14) Brigitte Hamann, *Die Habsburger, Ein biographisches Lexikon*, Wien, 1988
- 15) Gordon Brook-Shepherd, *Die Opfer von Sarajevo, Erzherzog Franz Ferdinand und Sophie von Chotek*, Stuttgart, 1988
- 16) Lavender Cassels, *Der Erzherzog und sein Mörder*, Wien · Köln · Graz, 1988
- 17) Max Polatschek, *Franz Ferdinand, Europas Verlorene Hoffnung*, Wien · München, 1989
- 18) Brigitte Vacha, *Die Habsburger, Eine europäische Familiengeschichte*, Graz · Wien · Köln, 1992
- 19) Ulrich Graf Arco-Zinneberg, *Meine Reise um die Welt, 100 Jahre Weltreise des Thronfolgers*, Artstetten, 1993
- 20) Gabriele Praschl-Bichler, *Das Familienalbum von Kaiser Karl und Kaiserin Zita*, Wien, 1996
- 21) Münze Österreich, *Exhibition Catalog, Franz Ferdinand „The end of an Era“* Wien, 1999
- 22) Wladimir Aichelburg, *Sarajevo-das Attentat* Wien 1999
- 23) Lucian O. Meysels, *Die Verhinderte Dynastie, Erzherzog Franz Ferdinand und das Haus Hohenburg*, Wien, 2000
- 24) Wladimir Aichelburg, *Erzherzog Franz Ferdinand von Österreich -Este*, Wien, 2000
- 25) Brigitta Mader, *Sfinga z Belvederja, Nadvojvoda Franc Ferdinand in spomeniško varstvo v Istri / Die Sphinx vom Belvedere, Erzherzog Franz Ferdinand und die Denkmalpflege in Istrien*, Koper, 2000
- 26) Wladimir Aichelburg, *Der Thronfolger und das Meer*, Wien 2001
- 27) Wladimir Aichelburg, *Der Thronfolger und die Architektur*, Wien · Graz, 2003

Erzherzog Franz Ferdinands Japan-Besuch 1893

Hajimu WATANABE

College of Liberal Arts and Science for International Studies

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2003)

Der österreichisch-ungarische Thronfolger Franz Ferdinand wurde am 28. Juni 1914 in Sarajevo zusammen mit seiner Gattin Sophie ermordet. Dieses Attentat hat die Geschichte grundsätzlich verändert. Stefan Zweig schrieb dazu: „ Da, am 28. Juni 1914, fiel jener Schuß in Sarajevo, der die Welt der Sicherheit und der schöpferischen Vernunft, in der wir erzogen, erwachsen und beheimatet waren, in einer einzigen Sekunde wie ein hohles tönernes Gefäß in tausend Stücke schlug.“¹ Zweig kommentierte das Opfer dieses Attentats äußerst negativ wie folgt: „ Denn der Thronfolger war keineswegs beliebt gewesen. Noch von meiner frühesten Kindheit erinnere ich mich an jenen andern Tag, als Kronprinz Rudolf, der einzige Sohn des Kaisers, in Mayerling erschossen aufgefunden wurde. Damals war die ganze Stadt in einem Aufruhr ergriffener Erregung gewesen, ungeheure Massen hatten sich gedrängt, um die Aufbahrung zu sehen, überwältigend sich das Mitgefühl für den Kaiser und der Schrecken geäußert, daß sein einziger Sohn und Erbe, dem man als einem fortschrittlichen und menschlich ungemein sympathischen Habsburger die größten Erwartungen entgegengebracht hatte, im besten Mannesalter dahingegangen war. Franz Ferdinand dagegen fehlte gerade das, was in Österreich für eine rechte Popularität unermeßlich wichtig war : persönliche Liebenswürdigkeit, menschlicher Charme und Umgänglichkeit der Formen. Ich hatte ihn oftmals im Theater beobachtet. Da saß er in seiner Loge, mächtig und breit, mit kalten, starren Augen, ohne einen einzigen freundlichen Blick auf das Publikum zu richten oder die Künstler durch herzlichen Beifall zu ermutigen. Nie sah man ihn lächeln, keine Photographie zeigte ihn in aufgelockerter Haltung. Er hatte keinen Sinn für Musik, keinen Sinn für Humor, und ebenso unfreundlich blickte seine Frau. Um diese beiden stand eine eisige Luft ; man wußte, daß sie keine Freunde hatten, wußte, der alte Kaiser ihn von Herzen haßte, weil er seine Thronfolger-Ungeduld, zur Herrschaft zu kommen, nicht taktvoll zu verbergen verstand. Mein fast mystisches Vorgefühl, daß von diesem Mann mit dem Bulldognacken und den starren, kalten Augen irgendein Unglück ausgehen würde, war also durchaus kein persönlicher, sondern weit in der ganzen Nation verbreitet ; die Nachricht von seiner Ermordung erregte deshalb keine tiefe Anteilnahme.“²

Dieser Franz Ferdinand hat 1893 23 Tage lang Japan besucht, als er 1892 - 1893 eine zehnmonatige Weltreise unternahm. Dabei führte er Tagebücher, die später publiziert wurden.³ Durch sie bekommt man einen vollkommen anderen Eindruck des Erzherzogs, als die Beschreibung Stefan Zweigs. Franz Ferdinand war nicht ein kalter, sondern ein intellektueller, empfindsamer Mann mit starkem Willen. Der negative Eindruck, den Zweig beschreibt, ergab sich wahrscheinlich aus der Diskriminierung, die insbesondere Franz Ferdinands Gattin und Kinder an der Hofburg, nach der morganatischen Eheschließung 1900 mit Sophie Gräfin Chotek, zu spüren bekamen. Dazu kam seine politisch proslawische Einstellung im Vielvölkerstaat, die im deutschen wie auch im ungarischen Volk sehr unpopulär war. Hier liegen wahrscheinlich die Gründe seiner Unpopularität. Mit der japanischen teilweisen Übersetzung seines Reisetagebuches möchte ich den Japanern ein Bild des wahren Franz Ferdinands vermitteln.

¹ Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern, Erinnerungen eines Europäers*, Stockholm, 1947, S.247

² ebs. S.250ff.

³ Erzherzog Franz Ferdinand, *Tagebuch meiner Reise um die Erde 1892 - 1893*, Wien, Erster Band 1895 & Zweiter Band 1896